ラテンアメリカの大学論
大学と国家・社会・ナショナルアイデンティティーの視点から

―1930年代までのチリのケースを中心に―

Misión de la universidad en América Latina: discurso de compromiso con la nación, la sociedad y la identidad nacional
―El caso de Chile desde la década de los 30 del siglo XIX hasta la década de los 30 del siglo XX―

中島　さやか
Sayaka Nakajima

＜はじめに＞

日本でも広く紹介されている英独仏米を中心とする欧米諸国の大学論とは異なり、一般に第三世界の大学論は日本ではなじみが薄いものである。

第三世界の大学は、教育、ベルリン大学以降の研究機関としての大学、そして近年盛んな生涯教育などの機能以外にも、文盲撲滅運動や、芸術・文化創作活動の積極的推進、ナショナルアイデンティティの構築など、先進諸国ではあまりなじみのない社会的・国家的な機能を果たしていることがある。

スペインからの独立以降も19世紀、20世紀前半を通じて植民地主義の遺産、エリート主義の牙城であると知識人の批判の的となった[1]多くのラテンアメリカの大学の中にあり、ラテンアメリカを代表する知識人、アンドレス・ベリョ(Andrés Bello)が設立に積極的に参加し、彼が初代学長を務めたチリ大学は特に20世紀前半、ラテンアメリカの中で模範的と言える存在だった。

チリ大学は、1842年に近代国家建設のための積極的な役割を担い、当初は教育機関でない大学として設立された。この大学は19世紀を通じて時代の政治的・社会的条件による制限を受けながらも発展し続け、20世紀前半には教育学部を中心にラテンアメリカ各地から留学生を集める地域の先端的な大学に成長した。

その後もチリの大学は、チリ大学をモデルとして設立・発展した他の7大学と共に、チリの高等教育、研究、知識人を独占するだけに留まらず、演劇や美術、バレー、オーケストラなどの音楽芸術部門や、国の代表的なスポーツ部門、テレビなどのマスメディアなども組織に包含していき、1960年代には世界にも例を見ない巨大な国家システムになった。

この、20世紀前半にラテンアメリカの一つのモデルとなり、また1960年代の政治・文化運動で重要な役割を果たしたチリ大学の発展には、スペインからの独立以降、チリ大学という機関を通じてナショナルアイデンティティの構築を推進してきた知識人の思想が背景に存在する。

本稿ではチリ大設立から、チリの大学論の重要なターニングポイントとなった1930年代までのチリの知識人の大学論の中で、ナショナルアイデンティティ、そして大学と国家・社会との関係に関する思想を、システムの構築に積極的に関与した3人のチリ大学長の言説を取り上げて分析し紹介する。ここで取り上げる3人の知識人は、いずれも大学という機関の枠を超え、教育界・政界・財界などチリ社会に幅広い影響力を持っていた人物であり、現在私たちが「学長」という言葉から想像できるは比較にならないほどの社会的権力を有していた。

なお、本稿ではこれら3人の大学論のほかに、チリをはじめ、ラテンアメリカ全体の大学論に大きな影響を与えたアルゼンチ

ン、コルドバ大学の大学改革運動の大学論にも言及する。

第1章　ラテンアメリカの大学論概論
社会的約束、ユニバーシティ・エクステンションの視点から

チリのケースに入る前に、ラテンアメリカの大学論についての概論を紹介しておく必要があるだろう。

19世紀はじめにラテンアメリカが相次いで独立した時代、ラテンアメリカにはスペイン植民地時代に建設された12の大学が存在した[2]。植民地時代、多くの大学では聖職者と宗教的教育が中心を占めていた。しかし独立後、多くの国において職業訓練的要素が強い実学中心のナポレオンモデルと称されるフランス式高等教育モデルが取り入れられ、以後このモデルはラテンアメリカで支配的になった。新しく誕生した共和国の法制度の整備に必要とされた弁護士を育てるため法学部に重点が置かれたことにより、このモデルを「弁護士大学[3]」とよぶ研究者もいる。チリ大学は、従来の宗教的教育に代わって導入されたこの実学モデルの典型的な例であった。

19世紀のラテンアメリカの必要性に適合していた実学モデルの大学も、20世紀に入ってからは、エリート主義的である、国の現状を反映していない象牙の塔である、など批判の的となり、大規模な大学改革運動へとつながる。その後ラテンアメリカの各地でその社会的・歴史的文脈に合わせた独自のモデルが模索されていく。

思想史の観点から言えば、メキシコ国立自治大学やペルーのサン・マルコス大学などラテンアメリカの地域中心大学[4]も、ラテンアメリカという枠を越え、一つの大学のモデルとして世界に影響を与えるということはなかった。また、ラテンアメリカにはスペインの哲学者、オルテガ・イ・ガセット(José Ortega y Gasset)[5]の

ように世界的に有名な大学論を著した思想家も生まれなかった。多くのアジアやアフリカの大学のように、設立からその発展に至るまで、世界の有名なモデルや著名な思想家の影響を受ける受容的立場にあったといえる。例えば、チリの大学は19世紀まではスペイン・フランス・ドイツなどのヨーロッパの大学や教育思想の影響を強く受け、また、20世紀以降はアメリカ合衆国の影響を強く受けてきた。

しかしながら、多くのアジア・アフリカの大学と同じように、ラテンアメリカの大学も外国の思想やモデルを単純に鵜呑みにしたわけではなく、それらを自国の現状に合わせて適応・発展させた。従って、それらの研究にあたっては、影響を与えた思想・モデルのみならず、その国の社会的・歴史的条件を詳細に研究する必要がある。

世界の大学史において周辺的存在であり続けたラテンアメリカの大学の歴史の中で、欧米諸国の大学にもインパクトを与えた歴史的出来事がある。欧米先進国に先駆けて1918年に起こったアルゼンチン、コルドバの大規模な大学改革運動である。

この学生運動の内容については第4章で少し紹介するが、大学論として重要なのは、この運動を通じて、大学が国家や社会に対して責任を負う、という考えがラテンアメリカで浸透し、広く一般に受け入れられるようになったことである。これは一般的に大学が持つ「社会的約束」(compromiso social)とよばれ、しばしばナショナリズムとも強く結びついている。

この「社会的約束」という言葉自体の示す具体的な内容は、この言葉が用いられる時代や大学によって異なる。しかしながら、基盤となる考え、すなわち、大学は象牙の塔であってはならない、国家の発展や社会に対して積極的に貢献するべきである、という考えは共通である。

この種の議論自体は世界の他の地域でもめずらしくないが、「社会的約束」が具体的に意味する範囲、そしてこのコンセプトに基づいて行われたラテンアメリカの大学の数多くのプログラムやプロジェクトは、ヨーロッパの大学の比ではないほど社会的重要性を持ったものであった。

ラテンアメリカでは、1970年代ごろまで政治の不安定や市場経済の未発達など、様々な要因によって、民間の研究・教育機関の発達が遅れ、高等教育・研究機関が大学という組織に一点集中する傾向にあった[6]。国を代表する知識人や文化人も大学という組織に集中しており、また、国家の機関が弱いため、他の地域では政府がイニシアティブを取って行う国民文化の保護・育成、国家の発展を促進するための労働者の教育や文盲撲滅運動なども大学が行う傾向にあった。これらの活動は大学組織中で「ユニバーシティ・エクステンション」の概念とその組織に吸収されていく。
日本では「ユニバーシティ・エクステンション」は、生涯教育や、アメリカ合衆国の州立大学などで主に行われている「サービス」についてのイメージが強い。しかしながら、1980年代以前までのラテンアメリカのユニバーシティ・エクステンションは、上に記述した例からも理解できるように、幅広い役割を担っていた。

米国のウェスト・バージニア大学のラテンアメリカ研究者、ジョン・スーパー（John. C. Super）は、ラテンアメリカとアメリカ合衆国のエクステンションについて次のように分析している。

「アメリカ合衆国におけるユニバーシティ・エクステンションは社会の産業化や農業の分野で絶えず変化するニーズに対応するために生まれたのに対し、ラテンアメリカのユニバーシティ・エクステンションは社会を再構築しようとする運動の中で生まれ、現存する社会システムへの批判の一部であった[7]。」

実際、ラテンアメリカの多くの大学は1918年のコルドバの大学改革運動以降、左翼運動や社会の周辺に位置付けられている人々、労働者や地方の農民などとの結びつきを強め、大学生が中心になって彼らに教育機会を提供し、それを通じて既存の社会体制に対する批判精神を植えつけようとの試みが行われるなど、政治的意味合いを帯びた運動が広がった。19世紀のフランスやベルギーの人民大学(Universidad Popular)にヒントを得たラテンアメリカの人民大学はその代表的な例である。人民大学では、学生が中心となって労働者や貧しい人々に対して工場や労働組合など、様々な場所を利用して無償で教育機会が提供された。

例えばペルーでは大学改革運動以降、学生指導者らのイニシアティブによって1921年初の人民大学がリマに作られた[8]。また、ペルーを代表する知識人・政治家であるビクトル・アヤ・デ・ラ・トーレ(Víctor Raúl Haya de la Torre)が中心となって1923年に設立したゴンサロ・プラダ人民大学は社会的に大きな影響を与えた。この大学は政治・社会的意味合いが強いことで知られている。

アヤ・デ・ラ・トーレはこの大学の初代学長を務めるが、この経験はのちに彼が亡命先のメキシコで設立するアメリカ人民革命同盟（la Alianza Popular Revolucionaria Americana：APRA）を設立する一つの大きなきっかけとなった。アプラ党は現代ペルー史に著しい影響を与えた前衛的な政治思想を持った党であった。

このように、エクステンション運動は、ラテンアメリカでは政治的社会改革運動を含む「社会的約束」という概念と強く結びついていた。

のちに教育・研究と並んでラテンアメリカの大学の役割の３つの支柱をなすエクステンションは、コルドバの大学改革運動以降、様々な運動を経てその「社会的約束」の意味を強め、それが大学人の常識の一部となり、のちに法制化され、ラテンアメリカの大学の特徴の一つとなる。

チリの大学は「社会的約束」そして、ユニバーシティ・エクステンションの役割が最も強く出ているケースの一つである。先にも述べたように、チリの大学の国家における社会的役割は幅広かった。

中でも1842年に設立され、20世紀前半にラテンアメリカ地域の中心的役割を果たしたチリ大学の歴史は、チリ国家そのものの発展と切っても切り離せない関係にあり[9]、そこには教育に携わった代表的な知識人のナショナルアイデンティティーを基盤とした大学論が大きく影響していた。

第2章　チリ大設立に関するアンドレス・ベリョの思想

本稿で取り上げるチリ大学は、既に1842年の設立の時点でその後の組織の発展を左右する近代的な思想、そしてそれを支える政治的・社会的背景があったことが指摘されている。ハイメ・ラバードス（Jaime Lavados）は次の4つの要素を挙げている[10]。

1．ヨーロッパの啓蒙主義がチリのエリート知識人層に浸透していたこと。
2．（他のラテンアメリカ諸国と比較して）国の政治が安定していたこと。
3．知識人の間にヨーロッパとは異なる、自国の条件に合わせた独自の、そして安定した経済・社会・文化的制度を基盤とした新たな国家を建設しようとする思想が存在していたこと。
4．文盲が人口の大半を占めており、疫病などの問題が深刻化する中、教育が国家の最重要課題の一つであるとエリート知識人層に認識されていたこと。

ここで取り上げるのは3番目の要素である。チリ大学設立には、ナショナルアイデンティティを用いて設立の背景となる思想を準備した知識人が存在した。中でもラテンアメリカを代表するベネズエ

ラ出身の知識人アンドレス・ベリョは決定的な役割を果たした。

チリ政府との契約で1829年にバルパライソ港に到着したベリョの当初の仕事は中央政府の行政であったが、到着後まもなく教育部門の仕事にも着手し、のちにチリ大学の設立に積極的に関わるようになる。

チリにはスペイン植民地時代に1738年の勅許証によって設立されたサン・フェリーペ大学が存在していたが、19世紀の初頭にはきわめて質の悪い弁護士と神学者しか育っていないとの批判を受け、1813年に消滅していた。サン・フェリーペ大学の高等教育としての機能は国立高等学校（Instituto Nacional）に吸収される。

ベリョが到着したころのチリは、他のラテンアメリカ諸国と同様、独立後、何をするべきなのかつかめていない状態にあったとラバードスは記述している[11]。

チリ大学の設立には、世界的に有名なアンドレス・ベリョ以外にも何人かのチリの重要な知識人が関っているが、ベリョはその中でも大きな影響力を有していた。彼は思想的背景の準備だけでなく、チリ大学設立のための法案作りにも積極的に参加する。

ベリョのチリでの大学設立に関する思想は、チリ滞在中に徐々に練り上げられていったものであり、彼自身が立ち上げた定期刊行誌「アラウカノ」などで部分的に発表されている。例えば、「政治的に独立してから、実用的な知識への扉を開くことができた[12]」など、独立によって近代的な教育・研究機関としての大学を作ることができるようになったと語り、彼が計画中の新大学の教育内容の中心が実学であることを示唆している。

ベリョは1931年、当時のチリ代表的な知識人マヌエル・モント（Manuel Montt）らと「高等教育の大幅な改革を行い設立予定の国立大学の教育をチリ的なものにする」との考えを表明している[13]。1839年、この大学の名称は当初の国立大学(Universidad Nacional)

からチリ大学(Universidad de Chile)に変えることになった。チリ大学設立の法案は1942年に国会を通過する。

1842年11月19日の法律第一条[14]には、チリ大学の役割が書かれている。

ここでは、国内全ての教育機関を管轄する機能の他に、チリにおける自然・人文科学の促進が掲げられており、外国人ではなく自国の学者の養成を強く意識した条文になっている。ちなみに、この時代の自然・人文科学（las letras y las ciencias）とは、今日では科学というよりは芸術とみなされるであろう分野も含む広い意味での科学である。

チリ大学設立に関する思想の集大成ともいえるのが、1943年のチリ大学設立にあたってのセレモニーで行われたベリョの演説[15]である。ベリョはマヌエル・モントらと共に、チリ大学の役割を明確にした。

演説の中でベリョは、かつてのスペイン植民地時代の遺産であるサン・フェリーペ大学と当時の文明の成果の二点を基盤として、チリ国家の必要に応じた、国家のための新しい大学を設立することを明言した。そして、ナショナルアイデンティティに基づき、大学を通じて近代国家の建設を行う意気込みを明らかにしている。

彼の演説に浮かび上がる大学像とは、恒常的な変化・革新を続ける近代社会に対応できるだけの十分な科学力をもち、科学の発展及びその応用に積極的な役割を果たしうる大学である。そこで目指されている教育は、純粋に理論的なものだったり、自分たちの現実からかけ離れたものであってはならない。「政府の」大学が目指すのは、科学の実用的な成果を伝える、祖国の発展に役立つ有用な大学である。また、科学のみならず文学についても、ヨーロッパの単なる模倣ではなく、独自のものを作り出す必要性を言っている。

この他にもチリ大学に国全体の義務教育を管轄する役割を託すなど、新設された大学は従来の植民地的な大学とは全く異なっていた。近代的な社会についての概念と独立以降のナショナルアイデンティティーに基づいて設立されていることが特徴的である。

チリ大学は学問的単位としては、哲学・人文、数学・物理、医学、法学、政治学・神学の学部を用意するなどフランスのナポレオンモデルを参考にしたものの、初等・中等教育機関の管理、研究、自国の文化養成など、幅広い機能を有した独特な大学となった。のちに教育哲学者ロベルト・ムニサガ(Roberto Munizaga)はチリ大学はイギリス・フランスをモデルとしながらも、どちらのものでもない独自のパラダイムになったと分析している[16]。

ベリョは1843年にチリ大学初代学長となり、1865年に没するまでの長期にわたってチリ大学とチリ国家の発展に尽くした。チリ大学はその設立以降、国家の発展の歴史と切り離せないほど重要な国家機関となり、1888年のカトリック大学[17]設立まで唯一の大学として国の発展に寄与する。

ベリョが目指した大学は、法律その他、実学のみにとどまらない、自国の文学の育成など、ナショナルアイデンティティーの構築をも含んだものであった。しかしながら現実には設立以降、経済的・社会的条件から構想をすべて実行することはできなかった。チリ大学は19世紀後半を通じてローマ法と民法典を学ぶ法学生を中心とするその他実学の職業訓練校な様相を呈するようになる。のちに、ハンス・アルバート・シュテガー（Hans-Albert Steger）が「弁護士大学」と呼んだ典型的なラテンアメリカの大学モデルである。このモデルは、聖職者が中心を占め、教会とスペイン王室向けの教育を行っていたかつての植民地時代の大学と比較すると、はるかにこの時代の社会的文脈と条件に適合したものであった。また、教育内容だけでなく、寡頭支配が続くチリの社会的文脈で、能力主義を導入し中産階級への出世の門戸を開く

など、重要な役割を果たす機関になった。しかし、そのモデルも１９世紀が終わりに近づくにつれ、批判の対象となっていく。

チリ大学はこの後、1879年、1929年の改革とそれに伴う法改正[18]で、自治権を徐々に拡大していく。これを通じて教育の自由、そして管理運営についてかなりの独立性を得、内部からの改革が中心になっていく。

第３章

イグナチオ・ドメイコ（Ignacio Domeyko）その他、社会的影響力を有したチリの教育家の数は多い。その中でもベリョの次に大学が担う社会的な役割、国家と社会、大学の関係について明確に主張したのは、バレンティン・レテリエール（Valentín Letelier）である。

レテリエールはドイツで学び、ドイツ式の教育をチリに導入した教育哲学者であったが、政治家でもあり幅広い範囲にわたって影響力がある人物だった。オーギュスト・コントに実証哲学を学んだ[19]彼は1892年に「教育哲学[20]（Filosofía de la educación）」という本を出版している。

レテリエールがこの本を発表した時代のチリ大学は、「単なる科学・技術を教える各種学校の寄せ集め」「ラテンアメリカにありがちな、学位を発行する公的機関にすぎない[21]。」とチリの優れた知識人であり教育家だったルイス・ガルダメス（Luis Galdames）に鋭く批判されたように、職業訓練校的機関になっていた。

レテリエールは、約500ページにわたって初等教育から高等教育まで幅広い彼の思想を述べたこの大著の中で、ラテンアメリカの高等教育機関（大学）が積極的な社会的責任を負うこと問うている[22]。彼によれば、大学は、「国家の問題に積極的に関り、伝統や慣習によって個人の行動を硬直化させる環境に対する人々の批判的意識を高揚させなくてはならない[23]。」

20世紀に入り、1906年から1911年までチリ大学の学長を務めたレテリエールは、初等教育から高等教育に至るまでのチリの教育の不備を激しく糾弾した。大学については、その職業訓練校的性質を省みて、極端に功利主義、実学主義に陥っていて、本来の科学的精神から遠ざかり、また、国家や実社会の問題からも乖離していると非難した。レテリエールにとって、当時のチリ大学は、自治権を獲得しているにも関らず、制度としての哲学を失っており、「国家の発展に直接的に関与することもなく、共和国の問題に対しても、沈黙を守ることを余儀なくされている[24]」状態にあった。

レテリエールは、急進的な教育改革を掲げ、アイデンティティーを失っていた大学に明確なオリエンテーションを与え、学術的活動を推進し、自らの教育哲学を実践に移してしていった。具体的なレベルでは、図書館をはじめとする設備の投資、新しい学科・分野の設立、大学院レベルの教育、音楽・美術学科の充実、教員ポストの増加、科学研究の推進、学生運動の組織化などを行った。当時最も先端的だったのは、この学生組織を国家レベルで公的に認知したこと、そしてユニバーシティー・エクステンションの推進であった[25]。但し、この時代のエクステンションはアカデミックな講演会が中心で、のちの一般大衆を対象とした「社会的約束」の意味でのエクステンションとは意味合いが違っていた。

ベリョと同様、レテリエールも自身の教育理念に基づいた計画をすべて実行に移せたわけではなかった。しかし、彼の教育理念は、彼の後に続く学長[26]や、学生の手によって、徐々に実践に移されていった。チリ大学の学生がイニシアティブをとって行われた労働者階級の人々に対する教育機会の提供、人民大学の運動などはその一例である。ちなみに、45年にチリ大学に設立された人民大学には、レテリエールの名前が冠せられた[27]。

第4章 アルゼンチン・コルドバの大学改革運動の影響
大学と社会・国家

ラテンアメリカを高等教育の歴史を記述・分析するにあたり、1918年、アルゼンチン・コルドバで起こった大学改革運動を無視することはできない。この運動に先立ってラテンアメリカでは、1900年代半ばごろから各国の学生指導者らが集まって会議などを行い、大学改革運動の思想的基盤を整えつつあった[28]。しかし、大きな社会的インパクトを与え、全ラテンアメリカに大学改革運動を広めるきっかけとなったのは、このコルドバの大学改革運動[29]である。

1918年の大学改革運動でアルゼンチンの学生は大学を「独立以降も自国の大学は依然として既存の社会構造を忠実に反映しているだけの極めて保守的な機関である[30]」と激しく糾弾した。彼らによると、その精神は「「副王」時代のものと変わりがない。すなわち、政治的・経済的に権力を有する支配者階層の要求にこたえているだけで、上流階級の子弟にしか門戸を開いていない[31]。」大学はこうした社会構造を変えるのに全く貢献していなかった。
1918年7月の声明文[32]（el Manifiesto Liminar）でアルゼンチンの学生は自国の大学を厳しく批判している。彼らにとって大学は国家の問題について完全に無関心であり、老朽化した動かない存在で、退廃的な社会を如実に反映しているだけのものだった。
コルドバの大学改革運動での学生の要求、そして運動の意味づけに関しては多くの研究があるが、ニカラグア大学の元学長で中米の著名な教育家、カルロス・トゥンネルマン(Carlos Tünnermann Bernheim)は以下の11項目にまとめている。

1．大学自治（政治、教育、管理・運営、財政面などについて）
2．学長など大学組織の指導者選出時、大学の共同体が選挙

を行うこと。学内の意思決定に教師、学生、その他の共同体のメンバーの参加できるようにすること

3．教員の選定、任期の決定にあたっては公募・公開で行うこと

4．教育の自由

5．参加の自由

6．教育の無償化

7．組織の改変：新しい学部の設立、教授法の改善、活気のある教育を行うこと、教員の文化水準向上

8．大学の門戸を全ての社会階層に開放すること

9．国の他の教育システムと大学とをリンクさせること

10．ユニバーシティ・エクステンション：大学の社会的機能の充実。大学の文化を一般大衆へ普及すること。大学が国家有する問題の解決に積極的に取り組むこと

11．ラテンアメリカの統一、独裁政治や帝国主義に対抗すること[33]

ペルーの哲学者アウグスト・サラサル・ボンディ（Augusto Salazar Bondy）はこの大学改革運動の政治的・学術的目的は以下の4つあると分析している。

1．出身階層や社会的地位を考慮せずに、大学を社会のあらゆる階層に開放すること

2．思想や出身に関係なく、すべての知識人や専門家に大学で職を与える機会を提供すること

3．大学の組織の民主化、学生参加

4．大学と一般大衆、国家とのリンク：大学の知識を広く社会に普及させること、文化活動の普及、人民大学の設立、労働者と学生との提携・協力[34]

チリではコルドバの大学改革運動の成果として3番の大学組織の意思決定への学生参加が取り上げられることが多いが、本稿のテーマである大学の国家、社会との関係についての認識も運動の重要な要素であった。

コルドバの大学改革運動以降、大学が国家の問題や社会の周辺に位置する人々に対して積極的に貢献するべきだとの認識が広く行きわたった。教育・研究という古典的な大学の役割に、「社会や国家に対して積極的に関り、貢献する義務がある」という新たな役割が与えられたのである。

例えば、この時期、国民によって財政的に支えられている大学は国民に貢献すべきだとの解釈から、主に国公立大学の学生の主導により、様々なプログラムが実行に移される。コルドバの大学改革の指導者の一人であったカブリエル・デル・マソ（Gabriel del Mazo）は改革運動に参加した学生が、労働者階級の人々のために工場や労働組合のオフィスなど様々な場所で夕方から夜にかけて多くの授業を行ったと回想している[35]。

社会や国家の問題に対して、大学は責任を負う。大学は教育を通じて国家の発展につとめ、一般大衆に批判的意識を持たせて社会変化を促す。それを実行するあり方の一つがラテンアメリカのユニバーシティ・エクステンションであった。

19世紀末にフランスなどで作られた大学にヒントを得た人民大学は大学改革運動前後、各地でユニバーシティ・エクステンションの一つの代表的な形として設立・発展した。人民大学の教師はその多くが現役の大学生であり、勉強の合間に労働者階級の人々への実用的な知識の伝授と意識改革に携わった。

コルドバの大学改革運動以降、多くのラテンアメリカの大学でエクステンションが教育・研究と並んで3つ目の大学の役割と公

的に認知され、組織の内部に国家の問題を研究、解決するための機関が設立され、法制化も進んでいく[36]。その機関には国民文化の保護・創設も含めた多くの機能が吸収されていく。のちにこれはラテンアメリカの大学のひとつの大きな特徴となる。

コルドバの大学改革運動の影響はラテンアメリカ諸国の多くの大学へも波及し、直接的・間接的に各地で強い社会的影響力を持った運動につながっていった。チリにおいてはイバニェス軍事独裁の崩壊にコルドバに影響を受けた学生運動が重要な役割を果たしたことが知られている。

最も有名なのは、第1章で触れたペルーで設立されたゴンサロ・プラダ人民大学とアプラ党(APRA)との関係である。ゴンサロ・プラダ人民大学の初代学長でアプラ党の創設者であるアヤ・デ・ラトーレは、彼の人民大学時代の学生と労働者との交流の中からアプラ党設立のヒントを得たことを後に述べている。

コルドバの大学改革運動以降、大学と社会や国家との間にある距離は縮まり、大学が国家の問題や国民の文化水準向上、意識改革に積極的に参加するべきだとの認識が浸透した。この議論はのちに1960年代の大学改革運動の文脈で再沸騰することになる。

第5章 フベナル・エルナンデスの思想
国民文化に果たす大学の役割

コルドバの大学改革はチリの学生にも大きな影響を与えた。チ1920年代に入り、大きな社会変動の時期に突入していた。伝統的な寡頭的支配秩序を揺るがし、中間層から労働者階級に支持を訴えたアレサンドリ政権の改革は、議会の反対勢力やインフレの影響など様々な要因で成功せず、チリ社会は国家的な危機にさらされる。1924年に軍が介入、国政はきわめて不安定な状態になるが、イバニェス・デル・カンポ(Carlos Ibáñez del Campo)将軍がアレ

サンドリ(Arturo Alessandri)を大統領に復帰させ、2年後彼自身が大統領になった後の期間、教育改革が進められる。その改革は大学にも及び法律が改定されるまで至る。

コルドバの大学改革運動の影響を受けたチリの学生は大学改革やイバニェスの軍事政権反対を声高に主張し、大きな運動を起こした。大学内の組織も混乱を極め、27年から3年8ヶ月で5人も学長が交代するなど、不安定な状態が続いた。

1929年、イバニェス大統領は大学教育の新たな法案を通過させるが、学生は、大学組織内における意思決定参加の権利などを主張して争いを起こし、大学を占拠した。これは国家的規模のニュースとなり、反対運動はのちに大統領の辞任へとつながっていく。

改革を要求する学生運動、そして混乱を極めたチリ大学学長選出の問題も、1932年に臨時の学長として法学者、フベナル・エルナンデスが就任してからは落ち着きを見せる。急進党に属していたエルナンデスは学生層の幅広い支持を得ていた。翌年エルナンデスは正式な学長に就任し、その後1938年、1943年に再選し51年まで継続して学長の職務に当たる。約20年にわたる就任期間はチリ大学初代学長、アンドレス・ベリョの次に長いものであった。

エルナンデスは大学の役割に関する明確な思想を有し、それに基づき様々な大きな改革を実践に移していく。エルナンデスの時代、チリ大学は主に教育の分野でラテンアメリカの中心的な大学となり、その教育学部（Instituto Pedagógico）は多くの留学生を集めていた。チリの歴史家フランシスコ・ガルダメス（Francisco Galdames）の証言によると、1930年代のチリ大学は、10%近くの学生が他のラテンアメリカからの留学生であったという[37]。この傾向は1950年代ごろまで続く。チリ大学はエルナンデスの就任機関中、継続した発展を続け、中米・カリブ地域のいくつかの国の大学や教育システムに重要な影響を与える[38]が、そこにはエルナンデスのナショナリズムに基づく大学の役割に関する思想が大き

な影響を与えている。

エルナンデスは、1933年に就任式で行った演説の中で次のように述べている。

「我々の文化の最も優れたもの、この機関（チリ大学のこと）の優れたもの、大学の伝統、科学、芸術、文化の教え、それらがヨーロッパの知性を経て我々に伝授されていることは否定できない事実である。しかし、我々は、自国の「国家性」に関する本当の意味での専門家、我々の国民が何を欲していて、何を必要としているのかについての深い知識を持つ専門家を有していない。

このことは、疑いもなく、教育危機でも最も深刻な問題の一つである：教育は活気を失っている。奇妙な押し付けと束縛を払いのけ、自らの精神の源から出てきたものを自分たちに伝えることが必要不可欠である。

学生は祖国と乖離した教育のために、我々が日々生活している社会的現実から完全に孤立した精神を学んでしまい、自分自身の問題を感じ取ったり、理解したり、解決策を推し進めるための情熱を失ってしまう[39]。」

エルナンデスは、就任にあたって大学組織の構成員や学生に対して大学の秩序回復、安定への協力を求めると同時に、政治的闘争からはなれ、「国家へ有用性」を目的に行動を行うことを呼びかけた。彼の目指す「有用性」とは、自分たちを取り巻く世界（国家）から孤立せずに積極的にその問題を追及・研究し、意欲を持って問題解決に取り組むことであった。

エルナンデスにとって大学改革は単なる法律の改正で終わる問題ではなかった。改革とは、教師と学生が一丸となって成しえるものであり、その精神が彼らに行き渡った状態になって初めて改

革と呼べると考えていた[40]。

彼はまた、職業的な専門教育が支配的となっていた大学の中心を科学的研究におくことが大切であると考え、研究活動を奨励した。そして大学の自治権を重要視し、教育、管理運営、予算など多岐にわたる意味においての自治を目指した[41]。その背景には、不安定な中央政府の政治・権力闘争に巻き込まれことなく、独立した形で教育・研究活動を行い、国家の発展に寄与したいという考えがあった。彼の思想には先人であるアンドレス・ベリョやバレンティン・レテリエールの思想、そしてコルドバの学生の提案が大きく影響していた。

エルナンデスが約20年に任期中に行った学内の教育政策で最も特徴的なのは、芸術部門での国民文化の保護・創造に対する積極的な推進活動、そして教師・労働者・外国人など幅広い層に行われたサマースクールをはじめとする短期の教育活動である。双方ともユニバーシティ・エクステンションの枠組みで行われた。

チリ大学は1929年に文部省から文化部(Departamento de Extensión Cultural)を受け取り[42]、国の至るところでクラシックのコンサートを始めるなどの文化活動を推進し始めていた。エルナンデスはその内容を充実させ、組織化し、普及に努めた。

1932年の学部編成で、文化一般のエクステンションと芸術関係エクステンションを分離し、組織の再編成を行った。

エルナンデスはレテリエールの時代以来続いていたエクステンションを、従来の講演会にとらわれず、国民文化の創造・伝播を目指し大幅にその枠を拡大した。映画の上映、演劇グループ、コーラス、バレーなどの様々な芸術活動に携わるグループを擁護し、大学内に雇用・活動の場を与えた。これらのグループはのちに国

を代表する国家の芸術家グループとなる。また、美術と音楽学部の再編成を行い、新たな美術館やサロンを作るなど大学は芸術面に関する機能をさらに拡大していく。

エルナンデスは、チリの著名な教育家アマンダ・ラバルカ(Amanda Labarca)と共に、1935年以降シーズン・スクールのプログラムを立ち上げた。広く社会に大学から文化を発信するという目的で作られたこのプログラムは、外国人や教師、一般の学生まで幅広い層を教育・国民文化の伝播の対象としていた。特に夏のプログラムの社会的影響力は当時のチリの夏の行事の一つになるほどであった。

以後、国内の他の大学にも似たようなエクステンションプログラムが取り入れられ、それぞれの地域で、大学が積極的な国民文化、地域文化創造、伝播の役割を果たすことになる。

エルナンデスは1938年に新聞記事のインタビューで自身のラテンアメリカの大学論と、エクステンションの活動について次のように語っている。

「スペイン語圏ラテンアメリカの大学の役割は、ヨーロッパの古い大学と同じであってはならない。ヨーロッパの大学が行っている専門家養成教育、純粋科学の研究はもちろん怠ってはならないが、歴史の浅い国において大学は文化の普及に積極的な役割を担わなくてはならない。大学は閉ざされた存在であってはならず、国家の現実に敏感な「生きた」組織でなくてはならない。そして、社会の問題の一つ一つに対して公的見解を示せるオピニオン・リーダーにならなくてはならない[43]。」

ラテンアメリカの大学の役割に関する彼の思想を述べた後、エルナンデスはこうした問題意識に従い、学長として、大学がもつ

文化を社会の中のすべての階層に対して与え続ける努力を惜しまないとの抱負も語っている。

彼のチリ、及びラテンアメリカの大学の役割に関する思想は、退任まで演説などを通じて繰り返し表明された[44]。そしてその思想はユニバーシティ・エクステンションの枠組みで実践に移されていく。

チリの著名な音楽家であり、エルナンデスと共に２０世紀前半を通して芸術分野での国民文化創設運動の立役者であったドミンゴ・サンタ・クルス(Domingo Santa Cruz)は、アンドレス・ベリョが描いた大学の理想像はその多くが実現できずに終わったが、エルナンデスの時代にその試みが復活したと分析している[45]。

おわりに

以上、ラテンアメリカの大学論の概略、そしてラテンアメリカの大学の中でもラテンアメリカ的特長を強く有するチリ大学の大学論をチリ大学の著名な3人の学長のナショナルアイデンティティ及び大学と大学・国家の関係に関して思想を中心に取り上げ、紹介・分析した。

ラテンアメリカの大学は伝統的に欧米の大学をモデルとしながらも、それぞれの国の歴史的・社会的文脈に基づいて独自のモデルを発展させてきた。スペインからの独立以降、アンドレス・ベリョらによって設立されたチリ大学の設立・発展のプロセスは、ラテンアメリカのナショナル・アイデンティティと国民国家の発展を反映しており、その背景には各時代の知識人の国家に対する思想が大きな影響力を有していた。

中でも、大学が国家や社会の問題について積極的に関与すべきである、という大学の「社会的約束」という考え方は、1918年のアルゼンチン・コルドバの大学改革運動を契機にラテンアメリカ全般に広く受け入れられ（チリではバレンティン・レテリエール

が19世紀末に既に明らかにしていた)、文盲撲滅運動や、労働者の意識改革、芸術・文化創作活動の積極的推進、など文化面でのナショナルアイデンティティー創設、国家の発展を目的とする様々な形の運動に結びついていく。これらの運動はユニバーシティ・エクステンションに吸収され、ラテンアメリカのユニバーシティ・エクステンションは独自の機能を担うようになる。

チリ大学は20世紀前半に教育の分野で周囲のラテンアメリカ諸国から学生を集め、その国の教育システムに影響を与えるほどの地域の先端的な大学に成長したが、そこに至るまでには3人の著名な教育家のナショナルアイデンティティを強く意識した大学論が背景にあった。地域性を重視し、自国の現状に合わせた教育デザインを行うことによって、一種の普遍性を獲得したといえる。

ラテンアメリカの多くの大学は、中央政府をはじめとする制度や、知識ベースの市場経済が未発達・不安定だったこともあり、知識が大学に一点集中の傾向があった。また「社会的約束」の思想を背景に先進工業諸国よりも社会的に影響力を持つ組織となったため、のちに多くの国で軍事政権など大きな社会変革の際に強い弾圧を受けることになる。

エルナンデス以降も組織を巨大化して行ったチリ大学及びチリの大学は、1960年代に欧米の大学に先駆け、社会変革の要求を伴った大規模な学生運動を起こし、また60年代から73年までのチリの文化運動、政治運動の中で積極的な役割を果たした。それはラテンアメリカだけでなく、アジェンデ政権のインパクトとともに世界にも影響を与えることになるが、組織の社会的重要性ゆえ、1973年の軍事クーデター以降軍の介入を受け、解体されていく運命をたどる。

註

1．チリではルドルフ・アトコン（Rudolph Atcon）の*La Universidad Latinoamericana*, ECO Revista de la Cultura de Occidente, Colombia, 1966が特に有名。チリのコンセプシオン大学ではアトコンの計画に基づいて大規模な大学改革が行われた。
2．Gonzárez G., Ignacio, *Un Ensayo de Reforma Universitaria, Fundamentos, Proyectos y Realizaciones en seis años de Rectorado*, Universidad de Concepción, 1968. p.8
3．特にHans-Albert Stegerの批判が知られている。
4．P．G．アルトバック『比較高等教育論』玉川大学出版会, 1994, p.142. 世界的には周辺的な存在にあっても、名声・研究・出版などにおいて地域の中心的機関であるもの。
5．José Ortega y Gasset, *Misión de la Universidad*, 1930. *Obras Completas*, la edición Alianza Editorial-Revista de Occidente, Madrid, 1983. に収録されている。
6．Huneeus, Carlos, *La Reforma Universitaria-veinte años después*-CPU, Santiago de Chile, 1988, p.27.
7．Super, John C., "Los orígenes de la Extensión en la Universidad Latinoamericana", *Universidades Nva.* épc. año 48. No.6, julio-diciembre 1993, México D.F., pp.8-17.参照
8．ペルーで人民大学を作る提案はコルドバの大学改革運動以前からすでにアヤ・デ・ラ・トーレによって行われていた。
9．Mellafe, Rolando, Rebolledo, Antonia y Cárdenas Mario, *Historia de la Universidad de Chile*, Ediciones de la Universidad de Chile, Santiago de Chile, 1992, p.11.
10．Lavados Montes, Jaime, *La Universidad de Chile en el Desarrollo Nacional*, Editorial Universitaria, Santiago de Chile, 1993, p.11.
11．同上 p.17
12．同上p.11, *El Araucano*からの引用
13．Andrés Bello, *Obras Completas*, tomo XV, p.98 (edición chilena).
14．Ley de 19 de noviembre de 1842 por la que se crea la Universidad de Chile
15．Bello, Andrés, Discurso en la instalación de la Universidad el día 17 de septiembre de 1843.
16．有名なRobert Munizagaの分析 http://www.geocities.com/Athens/9505/andresbello.html
17．カトリック大学は保守派がチリ社会の非宗教化に一石を投じる意味をこめて設立。その後チリ大学のライバル的存在として主に上層階層の子弟

に高等教育の場を提供を続けながら発達し、チリ大学と同じように、研究・教育部門だけでなく、芸術部門での国民文化保護・創造の一つの大切な機関となる。Krebs, R., Muñoz, M. A. y Valdivieso, P., *Historia de la Pontificia Universidad Católica de Chile 1888-1988 tomo I-II*, Ediciones Universidad Católica de Chile, 1994.

18. La ley orgánica del 9 de enero de 1879 de la Universidad de Chile とLey N.4.807 de 1929, el Estatuto Orgánico de la Enseñenza Universitariaをさす
19. Fuentealba, Leonardo, *Valentín Letelier y el pensamiento educativo en la época de la fundación del Instituto Pedagógico*, Editorial Universitaria, Santiago de Chile, 1964, p.61.
20. Letelier, Valentín, *Filosofía de la Educación*, Santiago de Chile, Imp. Cervantes, 1892.
21. Santa Cruz, Domingo, "Medio siglo de vida universitaria: 1900-1950 en torno al Rectorado de don Juvenal Hernández", Cuadernos de la Universidad de Chile, N.1, Santiago de Chile, 1951, p.10.からの引用。
22. Letelier, Valentín, op.cit. pp.543-547.
23. Ibdm.
24. Santa Cruz, Domingo, op.cit. pp.16-17. からの引用。
25. Ibdm., pp.18-19.
26. 具体的にはDomingo Amunátegui Solar (1911-1923), Gregorio Amunátegui Solar (1923-1924), Ruperto Bahamonde (1924-1926), Claudio Matte (1926-1927) などをさす。
27. Universidad de Chile, Prospecto de la *"Universidad Popular Valentín Letelier"* , Universidad de Chile, Extensión Universitaria, Santiago de Chile, 1945.
28. Barrancos, Dora, "La "extensión universitaria": una raíz dormida de la Reforma", *Pensamiento Universitario, Año* 1, N.1, Buenos Aires, Noviembre de 1993, pp.95-96.及びSuper, John C., op.cit. pp.8-9参照。
29. 本稿ではこれ以上の言及はしないが、改革運動の指導的役割を果たしたガブリエル・デル・マソ(Gabriel del Mazo)のLa Reforma Universitaria, Tomo II y III, Ed. Del centro de Estudiantes de Ingeniería, Buenos Aires, 1941.や *Estudiantes y Gobierno Universitario*, Segunda edición corregida y actualizada, El Ateneo, Buenos Aires, 1956.などの本が詳しい。
30. Tünnermann Bernheim, Carlos, *El nuevo concepto de extensión universitaria y difusión cultural*, Universidad Nacional Autónoma de México Coordinación de Humanidades Centro de Estudios sobre la Universidad, 1987, México, DF., p.5

31. Ibdm.
32. http://www.cefyl.org.ar/documentosmanif.htm
33. Tünnermann Bernheim, Carlos, "Aspecto de la Reforma Universitaria de Córdoba Reflejos en la Declaración Mundial sobre la Educación Superior: Visión y Acción", Universidad Iberoamericana Globalización e Identidad, Extra América, 1999, pp.221-222. 参照
34. Salazar Bondy Augusto, "reflexiones sobre la reforma universitaria", Actual, Universidad de Los Andes, 1968, N.2, p.40.
35. Tünnermann Bernheim, Carlos, El nuevo concepto de extensión universitaria y difusión cultural, p.9 からの引用。
36. Licea de Arenas, Judith, *La Extensión Universitaria en América Latina: Sus Reyes y Reuniones*, Universidad Nacional Autónoma de México,México DF. 1982.
37. Galdames, L. (1935) "Informes y Trabajos" (Vol. I.), Borrase Hnos., San José, Costa Rica. 2002年1月4日, IX Seminario Internacional en Ciencias Sociales y Humanidades, Instituto de Estudios Avanzados de la Universidad de Santiago de Chileでのルイス・ソリス(Luis Rubilar Solis)の公演 "Joaquín García Monge: portal de integración entre América Latina y el Caribe"からの引用。,
38. 同上
39. Juvenal Hernández, Primer Discurso de Juvenal Hernández al Ser Designado Rector de la Universidad, Boletín del Consejo Universitario, Sesión Extraordinaria en 2 de octubre de 1933.
40. Santa Cruz, Domingo, op.cit. pp.37-38.
41. Ibdm.
42. Ibdm., p.40.
43. Frente Popular, Santiago, Septiembre 1, 1938
44. 有名な例として1942年にチリ大学100周年を記念して行われたセレモニーでの演説がある。Juvenal Hernández, Discurso Pronunciado el 19 de Noviembre de 1942 en la Velada Solemne que, con Motivo del Centenario de la Cooperación, se celebró el Teatro Municipal de Santiago, 1942.
45. Santa Cruz, Domingo, op.cit., p.15.